

# 哲学ウォーク

ピーター・ハーテロー著<sup>1</sup>

Philosophical Walk  
Peter Harteloh

監修／河野哲也  
KONO, Tetsuya

翻訳／西山 溪・渡邊 文

NISHIYAMA, Kei WATANABE, Aya

## 1. イントロダクション

「歩く」ということは哲学者の人生にとって、またその仕事においても重要な活動であるといえます。フレデリック・グロス (2013) が数々の例、たとえばニーチェ (メタファーとしての歩き)、ルソー (自分探しとしての歩き)、カント (思考の訓練としての歩き)、ハイデgger (本来ゆっくり考え、インスピレーションの源を生むためのものとしての歩き)、ガンジー (神秘としての歩き) などを挙げて、その重要性を示唆しています。また、西田幾多郎の思想 (瞑想としての歩き) や、アリストテレス (歩きながら行われる教授) のような古代ギリシャの例も挙げられます。

「歩く」ことのこうした哲学的要素の意味について焦点を当てるのが、哲学ウォークの基本となっています。哲学ウォークは、有名な哲学者がかつて住んでいた場所や仕事をしてきた場所を歩くツアーではありませんし、都会や自然の中の面白そうな場所を歩いて楽しむものでもありません。哲学ウォークは哲学的思考を取得するための一つのやり方であり、それは哲学のプラクティスなのです。

私は2007年より、哲学ウォークを個人のコンサルティング、教育、またソクラテス的なグループ活動の際に取り入れています。この論文では、その際に哲学ウォークをどのように用いて思考を発展させていくものなのかを解説していきます。私は2013年5月18日に日本の江の島という小さな島で18名の人々と共に行った哲学ウォークを実例に、それがどのようなものであるかを具体的に説明していきます。私はこのメソッドを解説することによって、他の哲学者たちが哲学ウォークを実践したいと思うようになり、それぞれの結果を共有し合い、哲学プラクティスのメソッドとしてより一層それを発展させていっていただくことを願ってやみません<sup>2</sup>。

## 2. 準備

私は哲学ウォークを始めるためのステップを九つに分けました (table1 参照)。

**Table1：哲学ウォークの九つのステップ**

1. 準備：引用文を選び、必要であればルートの計画を立てる
2. 参加者へのルールの指示：基本的なルールは「歩く」か「話す」かどちらか
3. ルートを歩く
4. コンセプトがつくれた場所で止まる一スポットを選ぶ
5. 「ストップ」を要求した参加者に質問をする—質問するだけで、答えてはいけない
6. 質問（「最も良い質問」）を選ぶ
7. コンセプトをつくったスポットの写真を撮る
8. 再び歩き続ける
9. グループ・ディスカッション—反省し物語を抽象化する

まず初めに行うことは、準備です。哲学ウォークのためのテーマ(哲学者の用いたコンセプト)を選択し、そのテーマにぴったり合うような哲学者たちの言葉の引用を集めるのです。哲学ウォークの初めにすべての参加者はその中から一つの引用文を選択して、手に取ります。かつて私が哲学ウォークを始めたときは、こうした引用文を手取る方法は用いませんでした。それはあまり満足のいくものではありませんでした。というのは、こうした引用文を使用しない哲学ウォークは、しばしば参加者がその場所に対して自分の考えをただただ提示するという、哲学的な内容に欠けたものとなってしまったからです。そのようなウォークはほとんどコーチング・セッションやセラピーのようなもので、私の意図とはかなり異なるものでした。哲学者たちの引用文を使用することは、むしろウォークの哲学的な特徴を引き出し、単なるウォークを哲学ウォークとすることになるのです。ほとんど知らない人同士で行われるこの哲学ウォークのために、私は東洋や西洋の哲学からさまざまな引用文を用意します。個別的なコンサルティングとしての哲学ウォークの場合には、私はこうした引用文を用いることはしませんが、クライアントのもつテーマに従ってルートを計画したりはします (Harteloh & Mochizuki 2009)。

## 3. ルールの指示

ソクラティック・ダイアログと同様に、哲学ウォークにも哲学的な思考を促進するためのルールがあります。その基本的なルールとは、「歩く」もしくは「話す」ことです。つまり、話すことと歩くことを同時にしてはならないということです。話すことと歩くことを同時に行うと注意が散漫になるうえ、ウォークを和気あいあいとした雰囲気にし、ぺちゃくちゃ喋っている旅行者の集団のようになってしまうからです。それでは哲学ウォークの意味がなくなってしまいます。哲

学ウォークは「対話」であり、ふだん行うような会話は避ける必要があります。哲学ウォークでは、参加者は沈黙したまま歩きます。彼らは自分自身との対話 (inner dialogue) に没頭し、自分自身を取り巻く周りの環境から感覚や印象をつくり上げていきます。参加者にはそれぞれ、コンセプトをつくること (conceptualization) が求められます。すなわち、哲学ウォークの最初に自分が手に取った引用文中のその背後にある最も重要なコンセプト (概念) を探し出すのです。参加者はまた、コンセプトをつくるための適切なスポット (あなた自身のスポット) を探すように指示され、見つけたらそのスポットで立ち止まり、立ったまま意見交換を行います。どの参加者もウォークのあいだに必ず一つのスポットを選ばなくてはなりません。参加者たちはどこを歩くのかわかりません。が、こうしたことは哲学ウォークに未知という刺激を与えるものなのです。私たちの人生よろしく、参加者たちは未知の状況のなかでスポットを選び、判断し、自分の判断を正当化しなければなりません。このように、哲学ウォークとは、歩くことと立ち止まること、沈黙することと話すこと、自分自身との対話 (inner dialogue) と他者との対話 (outer dialogue) を交互に行っていくことなのです。

#### 4. ウォーキング

まずウォークの最初に、参加者はそれぞれに哲学者の引用文を一つ引いてから歩き始めます<sup>3</sup>。参加者の一人がコンセプトをつくるためのスポットを見つけたならば、全員がそこで立ち止まります。彼／彼女は、引用文を読み、自分でつくり上げたコンセプトについて述べ、そのコンセプトとそのスポットとその引用文の関係について説明を行います。次に、グループの人々には、立ち止まった人に対して質問をすることが認められます。ただし、そこでもよいことは質問だけで、コメント、判断、ディスカッションをしてはいけません。また、「ストップ」といった本人がグループの人々から受けた質問に対して答えることも認められません。そのかわり、立ち止まった人は、質問 (「最も良い質問」) を一つだけ選び取ることができます。このように、参加者は立ち止まるまでコンセプトとともに歩き、立ち止まったあとは、哲学ウォークが終わるまで選んだ質問とともに歩くのです。参加者はコンセプトをつくれれば終わりというわけではありません。彼らはウォークのあいだずっと、哲学的に思考するのです。質問すること、コンセプトをつくること、という二つの哲学における基本的能力は、哲学ウォークをつくり上げるための基本的要素なのです。そしてコンセプトをつくった人とそのスポットの写真を撮り、全員で再び歩き続けます。

#### 5. グループ・ディスカッション

哲学ウォークの終わりに、ソクラティック・ダイアログの考えにのっとったグループ・ディスカッションを全員で行います (ネルソン 1922)。このディスカッションは野外や教室でも行うことができるものです。私はディスカッションを整理するためにコンセプトをつくったときの時間 (順番) を記したものを用います (table2 参照)。

時に、つくり上げられたコンセプト同士 (もしくは連想されたもの、詳細に検討されたもの、応答したもの) のあいだにつながりが見出されることがあります。グループ・ディスカッション

**Table2：2013年5月18日に日本の江の島で行われた哲学ウォークにおいて、ウォークが始まってからコンセプトがつけられたその時間とそこでの引用文と参加者によってつけられたコンセプトを順番に記したもの**

- 15分 教師はドアを開けるが、入るのはあなた自身である—禅：「冒険 (Adventure)」
- 15分 我々は考えうる中で最も良い世界に生きている—ライブニッツ：「完全なもの (Perfection)」(写真1)
- 15分 華は愛憎に散り、草は棄嫌に生うるのみなり—道元：「自殺 - 生の終わり (Suicide-end of life)」(上と同じスポットだが、異なる引用文で、異なるコンセプトをつくり上げた)
- 30分 だが哲学それ自体、言い換えれば哲学的な生の様式は、部分に分けることができないが、論理的で自然的で倫理的な生き方をつくり上げるユニークな行いなのである—アド：「分けられないもの (Undividable)」
- 35分 沈黙を一層良いものにしないのならば、話してはならない—禅：「沈黙の価値 (Value-of-silence)」
- 40分 賢者は知識と行いを同じものとしてみなす。賢者は真実を見ている—バガバッド・ギータ：「アート (Art)」(写真2)
- 45分 あなたが理解すれば、物事はあるがままである。あなたが理解しなくとも、物事はあるがままである—禅：「愛 (Love)」
- 55分 自身の失敗から学ぶことで人は賢くなる。だがより賢き者は他者から学ぶ—禅：「学び (Learning)」
- 60分 哲学のない人生は空虚なものである。だが哲学のない生活もまた空虚なものである—ピーター・ハーテロー：「空虚であることの不可能性 (impossibility of emptiness)」(写真3)
- 65分 世界は事実の総体であり、ものの総体ではない—ウイトゲンシュタイン：「反省 (Reflection)」
- 70分 我々は考えうる中で最も良い世界に生きている—ライブニッツ：「快適な生活の追求 (Pursuit for comfortable living)」
- 70分 哲学者たちは世界を様々に解釈してきたにすぎない。重要なことは、それを変えることである—マルクス：「挑戦 (Challenge)」
- 75分 神秘とは世界がどのようにあるかではなく、世界があるということだ—ウイトゲンシュタイン：「予想外の出来事についてのアナウンス (Announcement of Happenings)」
- 90分 神は死んだ—ニーチェ：「希望 (Hope)」(写真3)
- 120分 世界は事実の総体であり、ものの総体ではない—ウイトゲンシュタイン：「語られるもの (what-is-said)」
- 120分 目的地に到達するよりも旅をしているうちが華である—仏陀：「思い出 (Memory)」
- 120分 目的地に到達するよりも旅をしているうちが華である—仏陀：「足るを知る (Learn to be satisfied)」(同じスポットで、同じ引用文で、異なるコンセプトを創り上げた)

のあいだ、私たちはこれらのつながりについての探究を行うのです。参加者たちはそれぞれ自分たちがつくったコンセプトについて説明をする機会を与えられ、哲学ウォークのあいだに彼らがどのような経験をしたかについて、話をします。つまり、ここではディスカッションが認められるのです。このディスカッションは例や質問、原理やコンセプトについての対話であるために、それぞれのスポットで撮影した写真が一つの素材として役立つのです。

## 6. 江の島での哲学ウォーク

私は、2013年5月18日、日本の江の島という場所で哲学ウォークを実施しました。江の島は東京湾の近くにある小さな島で、長い年月を経て太平洋からやってきた波に耐えてきた堅牢な岩の上にあるビーチ・リゾートです。この日の哲学ウォークには18名プラス1名の赤ちゃんが参加しました。周りに多くの観光客がいたなかで、私たちのグループは沈黙を守りながら約2時間歩き続け、そして参加者はみな、コンセプトをつくるためのスポットをなんとか見つけ出すことができました。

写真1は、開始15分後に立ち止まった参加者の写真です。彼女は、完全なもの(perfection)が引用文に込められたコンセプトであると考え、それを体現していたかのようなすべて同じ形をした小さな花々が植えられている場所で立ち止まりました。彼女は引用文を読み、(主として)コンセプトを決めじっくりと考え、そのコンセプトに関連した場所を探し回ったのです。

写真2は、開始40分後に立ち止まった参加者です。彼は引用文を読んだあと、その文章にぴったりの場所を探しまわり、それからその場所と文章と関連するようなコンセプトを考えました。彼にとってその引用文のキーワードは「見ること(Seeing)」であり、道中にあった守護神の像がその「見ること」をあらわしていました。この像は(また)、真実を見ることがアートであると思わせるような芸術作品でした。このコンセプトはテキストとそのテキストの世界にぴったりのものでした。

写真1



写真2



写真3



写真3は開始75分後に同じ場所で立ち止まった参加者の方々です。彼女たちは歩いているあいだ、自分が感じたことに集中し、そうしてコンセプトが出来上がったときに場所を選び、引用とその場所の意味を結びつけるためのコンセプトを出しました。

このように、このウォークが示していることは、コンセプトをつくるのがさまざまな方法でなされていたということなのです。とある参加者は(主として)引用文について深く考える一方で、あるコンセプトとその場所について深く考えるような参加者もいました。つまりは、人はさまざまなやり方で哲学的に考える(philosophizing)ということなのです。これらの写真は、グループ・ディスカッションのなか

でコンセプトを思い出し、分析するために用いたりもします。

## 7. 反省

グループ・ディスカッションでは、参加者たちにどのようにしてコンセプトをつくり上げ、自身が選んだ質問について取り組んだのかを話してもらいました。ある参加者たちは、歩いているあいだに感じたことについて深く考え、コンセプトと引用を関連づけることのできる場所を選んだそうです。こうした人は意味を媒介するものとしてコンセプトを用いる、ある種の直観主義者／構築主義者であるといえるでしょう(たとえば写真3の参加者などがそれに当たります)。

また、とある参加者たちは、引用文を読み、その文に込められたコンセプトについて深く考え、そのコンセプトにぴたりと一致するような場所を探したといいます。それは世界それ自体が諸々のコンセプトに従って形づくられるものであるとするプラトン主義のようだといえるでしょう(たとえば写真1の参加者などがそれです)。

そしてまた他の参加者は、引用文についてじっくり考え、引用にぴたりと一致するような場所を選び、そこからコンセプトを引き出しました。彼らはアリストテレスのように考えたのです。すなわち、コンセプトを、経験と世界が一致するものととらえたということです(たとえば写真2の参加者などです)。

こうして、さまざまなやり方でコンセプトづくりが行われているということが、このウォークで明らかとなりました。私たちは、これらのコンセプトのつくられ方を比較し、それを個人がつくったコンセプトと関連づけたりもできます。こうすることによって、自分自身のことを反省することが可能となるのです。

## 8. ナラティブの抽象化

江の島では最後に、コンセプトをつくった順に、それぞれの人がコンセプトを読み上げていき、最後に残った沈黙のなかで哲学ウォークは終わりを迎えました。私たちは彼らが話すストーリーに耳を傾けました。江の島を歩いているあいだに行われたこのコンセプトのストーリーは次のようなものです。

私たちは完全なものについて深く考えるという冒険、分けられないもの、(非常に騒がしい場所での) 沈黙の価値、アート、愛から出発しました。そして空虚であることの不可能性について学び、挑戦や予想外の出来事についてのアナウンス、そして希望としての快適な生の追求について反省をし、最後に、語られるもの、想い出、足るを知ることという形で終わりを迎えました。

最後三つのコンセプトはウォークの最後に選ばれたものであり、いずれもが道徳性を示すものでした。そのスポットに明確に関連していた自殺、すなわち人生の終わりは特に際立っていました。それは参加者の個人的なテーマであったように思われたからです。ある意味で、このストーリーにはさまざまな思いがめぐらされており、そしてまた哲学において重要な要素でした。とはいえ、このストーリーはこのグループが歩きながらつくりあげていったものです。よくこうしたコンセプト同士には関連性を見出すことができます。というのは、私たちはふつうコンセプトから何かを連想したり、そのそれをより精密化したり、またそれについておかしいなと思ったりするからです。私はウォークによって生み出されたこれらのさまざまなコンセプトを結びつけるものがこのストーリーであると考えています。それはおとぎ話のようなものではなく、ウォークをした集団の中で生まれた信頼や熱意(morale)といったものを含むものであり、またそれは記憶に残り、自身へのおみやげとなるようなものなのです。

このストーリーはウォークの集団が歩いている中で生み出されたコンセプトによってつくられたものであり、それらのさまざまなコンセプトを超越したもののなのです。このストーリーは、抽象化されたものであり、ソクラティック・ダイアローグの原点にあるような後退を行ったりはしません。もともとの原点に後退していくことは、しばしばプラトニックな移動であるとして批判されているものです。そこで私は、こうした後退のかわりとしてストーリーをつくり上げ、前進することにしました。そのストーリーの中にはすべてのコンセプトが使われなければならないので、それはグループ・ワークを必要とします。どのコンセプトも除外されてはならず、除外された場合は「なぜそれを除外するの?」と問われなければならないのです。ある参加者のコンセプトが取り残されてしまった場合は、そこに関心が向けられなければならないのです。その人はグループから取り残されていませんか?なぜですか?といったように。こうして、私たちはこのグループにとって非常に意味のあるストーリーをつくり上げるのです。

このストーリーはともに哲学することによって生まれるものなのです。ストーリーをつくることは、哲学者がよくやることですが、それは、正確かつ批判的に一つ一つの点や、コンセプト同士の結びつきを考えることで、正しい書式でテキストをつくっていくようなやり方です。それは、さまざまなコンセプトを一つに結び合わせるようなコンテキストを生み出し、集団の中で生まれ

た信頼や熱意を伝えるものなのです。参加者たちは、こうしたことを哲学ウォークからもらった思い出として引き続き行っていくことでしょう。太平洋に浮かぶこの小さな島で完全性を追求することで私たちが得たものは反省（足るを知るということ）をするという態度だったのです。

#### 註

- 1 ピーター・ハーテロー (Peter Harteloh)。哲学者。2007年よりオランダのロッテルダムで哲学プラクティスの実践を行っている。彼の関心は主に個人個人のコンサルテーション、ソクラテス的な集団で行われる対話、そして哲学ウォークである。彼が行った哲学ウォークはタイ (2010年)、カンボジア (2012年、2013年)、日本 (2009年、2013年)、中国 (2013年)、そしてスウェーデン (2013年) など多岐にわたっている。
- 2 哲学ウォークを行う際、ソクラテス的なエクササイズのように、参加者はランダムに引用文を選びます。また、授業やコンサルティングでは、参加者に特定の哲学者の引用文を渡すことで、参加者が実際にコンセプト創りを行ったり、スポットを見つけたりできるようにします。
- 3 哲学ウォークを行う際、ソクラテス的なエクササイズのように、参加者はランダムに引用文を選びます。また、授業やコンサルティングでは、参加者に特定の哲学者の引用文を渡すことで、参加者が実際にコンセプト創りを行ったり、スポットを見つけたりできるようにします。

#### 参考文献

Gros, F. *Wandelen, een filosofische gids*. Amsterdam: Bezige Bij Uitgeverij 2013.

Harteloh, P.P.M. & T. Mochizuki. *Thinking in the city. City walks as philosophical practice*. Proceedings of the 2<sup>nd</sup> Conference on Phenomenology and Architecture, Kyoto 2009.

Nelson, L (1922). *The Socratic Method* (Translation by Th. Brown 1949) [www.friesian.com](http://www.friesian.com), on May 13, 2013.